

令和5年度 SDGs インクルーシブ教育システム推進事業

第1回インクルーシブ教育推進フォーラム



障害のある子どもと障害のない子どもが共に学び、笑顔で過ごす学校へ
— 共生社会を形成する一人として —

11月21日(火) 13:30~16:30
富山県総合福祉会館 サンシップとやま 1F 福祉ホール

【日程】

12:50	13:30	13:40	14:50	15:00	15:25	15:40	16:20	16:30
受付	開 会 式	講演(質疑応答含む) 70分	休 憩	意見交換 25分	休 憩	鼎 談 40分	閉 会 式	

【講演】

『どうなる特別支援教育？
～インクルーシブな社会と子どもたち～』

講師：植草学園大学副学長（教授）
野澤 和弘 氏



【鼎談】

『どうする？富山のインクルーシブ教育推進』

<登壇者>

フォーラム講師 野澤 和弘氏
富山大学教育学部教授 小林 真氏
インクルーシブ教育推進員 浜松 英久氏

講演

どうなる特別支援教育？—インクルーシブな社会と子どもたち—

植草学園大学副学長 野澤 和弘 先生



参加者の感想から

「どの国も発達障害といわれる子供たちが急増しており、通常の学級にも増加している。通常の学級の問題を解決しないと特別支援教育は進まない」という言葉が印象的であった。学級経営にたくさんの工夫や配慮が必要であり、教師の柔軟な対応が求められていると感じている。

企業の採用担当者が「子供たちを育てている先生に会いたい。どんなに大切に愛されてきたか知りたい。愛情をもって育てられた子供は、どんな時も自己肯定感があり耐えられる。コミュニケーションができる、困難な状況下でも仲間を助け、社会のことを考えられる」と話されたことを聞き、子供たちに愛をもって接することが教育の原点だなど、初心に戻ることができた講演でした。

何が彼らの本当の障害となっているのかを考えるきっかけになりました。大切なのは一人一人の特性に応じた環境を整えること、先生方や保護者、地域の方々が発達障がいについて正しく理解し愛情をもって関わることだと思います。まずは、彼らが何が好きで何に興味を示しているのか、一つ一つの言動に耳をすませ、心を寄せてほしい。彼らのことを知りたいと真摯に向き合ってくれる人との出逢いや関わりは彼らをぐんと成長させます。（後略）

心が揺さぶられました。この1時間で自分の価値観が変わったように感じています。

野澤先生の「弱さを受け入れる社会の実現」という言葉が印象的。学校ではでこぼこが許されず、生きにくい社会で自己肯定感が下がりやすい環境に生徒がいる現状から寛容さがある学校に変わっていかねばならないと思いました。

【意見交換】

【テーマ】

1. コーディネーター 「わが校のインクルーシブ教育推進の現状」
2. 一般参加者 「それぞれの立場から見たインクルーシブ教育推進の現状」



25分という短い時間でしたが、コーディネーター同士または、教育、福祉、医療等のいろいろな立場の者同士での意見交換や課題共有が白熱した雰囲気の中で行われました。

意見交換グループの記録の一部

相談 校内委員会・教育支援委員会 (小中連携)
 運営委員会 (市教委との連携)
 情報交換会 (保小連携)
 生徒指導委員会

共通理解

- "障害" 保護者の抵抗 面談 学びの場
- インクルコンパス 推進不十分
- 校内研修 若手多い
- 規模の割に支援必要な子供多
- 環境 教室の場所
- 関わり方によって子供がかわってしまう

交流級との関わり
 子供自身の受け入れ
 幼保小、入学前の情報共有
 別室登校
 友達、担任以外の教員も声かけ

障害者相談員... 学校、訪行と関わりあり
 障害者とわからない=無知=怖いと思われ、1人目だけお違ふ
 いちも... 似たような同じこと教育をうけるというのは、このまま考えればいいのかな? (個別対応)
 先生... 学力向上、特別支援学校 → 学力(は)あるにたのしみ、おもしろいかな?
 (音) 子ども同士支援 (音) 先生が全部めんどくさい、子どもの本音の関わり
 いじめにひかれ...
 身体... お世話(お世話) = 怖いと思われ、せまいコミュニティにたのしみ。
 親 支援学校望まれるけども...

交流級... お互い=たのしみ... 行けばいい、受け入れ... → 目的話し合うこと必要
 単一=一番にやることはいい!!
 やることも、現場はまわらない。目の前が手がいっぱい...
 生活単元の充実、特支=個別、いい? 学力=たのしみ... (同じ時間、授業を、共有)
 先生の質の下がっている... 視点をかえ、その子に合う支援をすることで子どもは... 伸びることにしよう!

通常学級で、担任とスタディキイト (本気では整っている)
 この児童以外にもいるようなタイプの子が多い中、大変。
 この中でどのようにインクルーシブ教育をすすめていくのか、課題。
 (環境、体制、資質)
 担任: WISCの結果など理解して聞かれているか、知らない先生もいる。
 受診や結果(診断書、検査結果)も伝えて、普段の関わりを工夫できるとよい。
 福祉との連携: 現場の人にとっても、福祉の人は何でかかっているのか、疑念は...
 福祉の人の資質もあげながら、お互いに連携できる体制があるとよい。教育と福祉の連携。
 ◎ 連携の課題: 親の意見、お互い(児童、家族、教育、福祉)満足できるような工夫が必要
 (情報共有(園、小))

特生によって ⇒ みんなとすることはストレス
 フルインクルーシブ
 早期に適切な支援 → 将来的に適応できる
 通級 支援級 スタディキイト
 障害の理解 2次障害生じる前: 自己肯定感
 地域性: 小規模 30人程度で見ることがある
 差 中学校や不登校に悩むこともある 中学校との連携
 各人の困難 自己理解できるように
 センターの機能を 特別支援学校: 特別教育支援連絡会 協働の仕組み
 地域性: 訪問による支援 情報提供
 連携: 通常級: 支援級: 少人数: コーディネーター: 50人、医師: 1人

第1回インクルーシブ教育推進フォーラム 意見交換 記録用紙 (特支コ)

- ・ **教育課程編成の工夫** 支援級 → 交流級 → 通常級 の順で
担任・支援員が付き添えるように
- ・ **名簿順**、交流級での座席の位置 みんなの中に混ざるように
- ・ **学びの場の変更** 中学校から支援級入級したい。小から見学受け入れている。
小で通常級...中が不向きが増える。市として対策している。
- ・ **居住地校交流** 社会参加、自立に向けて。相手校と連携 学期に1回程度
いろいろな教科で行う。みんなが同じことを学ぶ意識をもたせる
温度差が課題
- ・ 放課後 情報交換タイム **共通理解**を高めることかである
- ・ 支援級在籍児童への対応 人手の足りなさ、設備の不足
- ・ 学年を積み重ねるうちに、自立の心を育て、一人で交流級に行けるよう少しづつ手を離す工夫
- ・ 行きたくない(交流級に)時は、行きたくないと言えることが大事...受け入れて、選ばれる
多くの生徒と対応

第1回インクルーシブ教育推進フォーラム 意見交換 記録用紙 (特支コ)

- ・ 学校の割強の生徒が個別の支援(相談室、通報等)を必要としている。
支援に対する教員の負担が大きくなっている。教員数の不足
- ・ SC、SSWとの連携、学校としてのチーム対応
- ・ **個別の教育支援計画**、生徒のアセスメントの共有、視覚的な配慮
校内教育支援委員会、ケース会議
- ・ 通報利用数が多く、回数が十分に確保できない
- ・ **個別の教育支援計画の定期的な見直し**、校内体制
担任、通報、スクールカウンセラー...
連携が重要
- ・ 交流級との活動時間のちがひ
- ・ **全体の生徒指導支援と個別の対応とのバランスをとることが大変**

第1回インクルーシブ教育推進フォーラム 意見交換 記録用紙 (特支コ)

- 小 400名通編2
- ・ 通常級の先生のカラあげの必要性 子どものついでに理解する研修...
 - ・ 校内支援等を行う、というが形式的な形、という
交流が意味のあるものに行っている。通常級に行っているのと
通常級の子にも特支級に来てもらっている。
通報担と保護者
り連絡しているのは
よい。
 - 中学 初めの支援級でたへる方がいる。教科指導 変わった
通常級のTが、知らないらしいことが多い (肢) 自治体の理解
保護者への理解
を高めること。
 - 小生57人
・ 小さい学校なので、すべての子に対する理解が求まっている。
・ 教員側のヘルプの人が多く、連絡共通理解が、うまいかたがある。
 - ・ バラバラと若手の共通理解を進めている
 - ・ 通担として子どもと通じて担任と連絡共通理解して
 - ・ 通担の空き時間の教室に入ってもらって、役割
 - ・ スタッフと役割を、ス→担 Xも担 担→ス 連携、なんとかが打ち合わせもしている

第1回インクルーシブ教育推進フォーラム 意見交換 記録用紙 (特支コ)

- ・ **特支-通報** 合理的配慮
通常 多様な学びの場 生徒の状況+保護者 → 教育支援委員会 → 通報
図書室、障害による適切な対応をえる。本・PC
学級の友達のふいことやつ → 学級 学校づくり
- ・ 校内教育支援委員会の充実化
通常級との連携を強めている
SSTなど 役割分担で負担がかかきいている
小人数 通報の子が利用 学力のこ利かんをやす
支援計画 指導の重点
全体にできること → 個別の指導
みんなのことについて
よいことを啓発 支援委員会にて

【鼎談】 (テーマ) どうする？ 富山のインクルーシブ教育推進

意見交換の記録を基に、話が始まりました。

参加者の感想から

社会全体が、インクルーシブに変わるという視点でお話しいただき、何のための教育なのかの意味を含めて考えることができ、とても有意義でした。

障害者の力を生かし、地域の活性に活かすようにコーディネートすることが必要であることを学び、様々な活動内容を知ることができました。

社会の一人一人が意識を変えていかななくてはならないのだと思います「支援者の覚悟」ということに同感です。

知的障害のある人たちで作るロックンロールバンドが引っ張りだこである話や、農業と福祉をつないでいく話、地域の産業を支援したい人を取り組んでいって成功した例などを聞くことができ、私たちが行う支援で障害者の輝き方が変わることを知りました。

就労にあたって、子供たちに身に付けさせたいものは、自尊感情であるという話が印象に残った。今後も子供たちの強みを生かし、成功体験を積むことのできる活動に取り組んでいきたい。

勤務しているこども園では、障害のある子供の支援プランを1年単位で考えていたが、もっと長い単位で将来を見据えて考えていくことが大事だと気づかされました。

教師にとっての「長い目」が1年間になりがちという話に、はっとなった。年度で成果を残すのが学校なので、自分が担任の間にここまでできるようにしたいという考えが、子供たちの伸びようとする速度に合わなくなっていることに気付いた。

障害のある人が社会のど真ん中で人生を楽しめるかどうかは、支援者側、周囲の理解の問題であるという言葉が印象に残った。障害のある人が肩身の狭い思いをすることなく、前向きに生きていけるようにするためには、どのような支援が必要かを全教職員や保護者、地域と考え、行動にうつしていかなければと思いました。

